

Title	若い世代の文章
Author(s)	佐竹, 秀雄
Citation	語文. 40 P.36-P.43
Issue Date	1982-11-20
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/68697
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

若い世代の文章

佐竹秀雄

一、はじめに

筆者はかつて若者雑誌（若者を対象にした雑誌）のことはについて調査した。^{（注し）}そこで、語種、表記（字種）、文体について分析し、

(i) 外来語が多用されていること。

(ii) カタカナの使用率が高いこと（外来語がカタカナで書かれるだけでなく、感情や評価を表す語にもカタカナが使われやすい）。

(iii) 文章そのものが話しことは調であること。

といった特徴が見られることを指摘し、とりわけ(iii)の話しことば的な文体に、若者雑誌における文章の本質的な特徴があることを述べた。さらに、こうした話しことば的な文体を「新・言文一致体」と名づけ、その文体の傾向が雑誌の文章のみならず、大学生や高校生といった一般の若い人々の間に浸透していくだろうと予測しておいた。

そこで、本稿では、果たしてそのような傾向を実際にどの程度認めることができるのかについて分析を加えたい。つまり若い世代の

文章における語種・表記（字種）、文体などについて調査し、それを若者雑誌や一般の文章と比較して新・言文一致体の傾向が認められるかどうかを検証しようというのである。

二、調査対象

ここでの若い世代というのは、十五、六歳から二十歳すぎぐらいの人々をさす。この世代の文章を調べるにあたって、雑誌への投稿を取り上げることにした。前回の調査〔注1〕における分析の対象は、若者雑誌の本文が中心で、雑誌の送り手側の文章、つまり編集者や文筆業を職業とする、いわゆるプロの文章であった。それに対して、今回は、雑誌の受け手側である一般の人々、つまり、アマチュアの文章を分析し、それを前回のものと比較しようというのである。

取り上げた雑誌は次の通りである。

- (a) ギャルズ ライフ（主婦の友社 一九八二・八）
- (b) パラエティ（角川書店 一九八二・八）
- (c) ビッグ・トゥモロウ（青春出版社 一九八二・八）

(d) ビックリハウス (バルコ出版 一九八二・六)

(e) 平凡 (平凡出版 一九八二・八)

(f) ホットドッグ・プレス (講談社 一九八二・七)

(g) ポップティーン (飛鳥新社 一九八二・七)

(h) ポパイ (平凡出版 一九八二・六)

(i) ミス・ヒーロー (講談社 一九八二・七)

(j) 明星 (集英社 一九八二・八)

これらの雑誌のうち、(a)(g)(i)が女性向け、(c)(f)(h)は男性向けの雑誌である。いずれの雑誌にも二ページから八ページ程度の読者投稿のコラムが設けられている。ただし、(d)の『ビックリハウス』は、雑誌全体が投書で作られたようなもので、新しい流行語や地口を作って応募するコーナーとか、おかしかったこと、楽しかったことなどの体験を報告するコーナーとかいうように各種の投書から成るコーナーが多い。そこで、他誌における投稿とのつりあいから、『ビックリハウス』の場合は意見や感想を述べるコーナーの文章だけを対象にした。

右にあげた十誌において、対象となる投稿は全部で百十、つまり百十人分であった。各誌六、七人から十数人分であったが、(b)『バラエティ』のみ三十人と特に多かった。そこでバランスを考慮して、『バラエティ』からは二十人分を無作為に選出し、他の十人分を削除した。そして全体で百人分、つまり百種の文章(総文字数にして約三万五千六百字)を選び出した。

以下、この百種の文章について、語種、表記(字種)、文体上の特徴を分析してゆくことにする。

三、語種と字種の比率

まず語種について調べてみよう。ところで百種の文章の中には、字数千三百字という比較的長いものから、わずか百字程度の短いものまである。全体を調べると、長い文章の影響が強くなりすぎるおそれがあるので、各文章から一文ずつをサンプリングして全体で百文を抽出し、それを標本として調べることにする。言い換えれば、一人一文ずつを取り出し百人分をまとめて一つのサンプルを作ったことになる。

これについて、自立語の語種の比率を調べてみると、

漢語 一四九(一九・七%)

和語 五一九(六八・七%)

外来語 四二(五・六%)

混種語 二九(三・八%)

その他 一六(二・一%)

という結果になった。「その他」というのは「聖子クン」「千春」「下田」といった人名や地名である。

右の数値を見ると、漢語が少ないことに気づく。一般の文章では、漢語は少なくとも三〇%程度はあるのが普通だと推測される^(注2)。漢語が少ないのに対して和語が多いが、この傾向は若者雑誌の本文の場合にも見られた。しかし、若者雑誌と違って外来語はそれほど多くない。五・六%というのは、平均的な値、たとえば一般向けの雑誌の値に近いものと言えよう。

次に字種についてであるが、同じ百文を調査対象にして調べてみると、次のようになった。

漢字 五五一(二八・五%)
 ひらがな 一七八七(五九・九%)
 カタカナ 三四四(一一・五%)
 洋数字 一八(〇・六%)
 英文字 三〇(一・〇%)
 記号 二五五(八・五%)

漢字が二〇%を割るといふのは非常に少ない。一般の文章では三〇%前後の値を示すのが普通である。ひらがなの六〇%はかなり多く、カタカナの一一・五%というのも高め^(注3)の値である。

右にあげた投稿の文章における語種、字種の比率の数値を若者雑誌の場合と比較してみよう。その際、両者の位置づけをより明確にするために、若者向けでない一般の雑誌に投稿された文章についての調査結果をもあわせて比較する。つまり、

A 若者雑誌の本文(若い世代向けに書かれたプロの文章)
 B 若者雑誌の投稿(若い世代のアマチュアの文章)
 C 一般の雑誌の投稿(一般のアマチュアの文章)

の三種の調査結果を数量的に比較しようというのである。

Aについては、先述の「注1」の調査でのデータを用いる。Bは本稿での調査データである。

Cについては、やはり過去の調査のデータを利用する。一九七七年七月から八月にかけて発行された雑誌で比較的よく読まれているもの六十三誌を選び、その字種比率をいくつかの記事について比較調査した。その際、読者の投稿についても二十三人分のデータを集めて調べている。ここではそのデータを利用する。^(注4)^(注5)

A、B、Cの三種について、語種別比率の比較をしたものが表1、

表1. 語種比率の比較

	漢語	和語	外来語	混種語
A. 若者雑誌の本文	21.9	60.6	12.9	4.6
B. 若者雑誌の投稿	20.2	70.2	5.7	3.9
C. 一般雑誌の投稿	33.1	62.1	3.3	1.4

表2. 字種比率の比較

	漢字	ひらがな	カタカナ	洋数字	英文字	記号
A. 若者雑誌の本文	20.0	51.4	20.4	0.9	0.7	6.6
B. 若者雑誌の投稿	18.5	59.9	11.5	0.6	1.0	8.5
C. 一般雑誌の投稿	28.2	64.7	5.4	0.2	0.3	1.2

字種別比率の比較をしたものが表2である。ただし、A、B、Cの三種を比較するために一部数値の手直しをした。たとえば、表1の語種別では、人名・地名の「その他」を省いて計算し直した。そのため先にあげた数値と少し異なっている。表2のCについても元のデータに対して同様の手直しをした。

表1、表2を見ると、Cの値が三種の中では、いわゆる平均的な文章の値に最も近いようである。

表1の語種に關しては次のように言える。

Bは、漢語に關してはAとともにCより少なく、和語についてはAやCよりも多い。外来語はCよりも多いがAほどではない。

つまり、若い世代の文章は、

・ 若者雑誌ほどには外来語は多くはない。一方その分だけ和語が多くなっている。漢語はほぼ同じぐらいである。

・ 一般の投稿の文章と比較すると、漢語が少なく和語が多い。

また外来語もやや上回っている。
ということができる。

次に字種比率について見ると、Bは、漢字の比率がAとともにCに比べて少なく、ひらがな、カタカナの比率は、AとCの間である。

つまり、若い世代の文章は、ひらがな、カタカナの比率では、若者雑誌の文章と一般の投稿の中間に位置するが、漢字の比率に關しては、若者雑誌に近い關係にあると言える。

以上、語種と字種の比率についてまとめると、若い世代の文章と
いうのは、

・ 漢語が少ない

・ 漢字が少ない

という点で、一般の投稿よりも若者雑誌の文章に似ているし、

・ 外来語の比率

・ ひらがなの比率

・ カタカナの比率

の点では、一般の投稿と若者雑誌の文章の中間に位置しており、

・ 和語が多い

点で、一般の投稿とも若者雑誌の文章とも違った面をもっている。

ここで言う「若い世代の文章」とは若者雑誌に掲載されているものであり、ややもすると、若者雑誌の文章と同種のものと思われがちである。大きく見れば、たしかに若い世代の文章は、一般の文章よりは若者雑誌の文章に近いと言えるのだが、現実には、和語や外来語の比率、および、ひらがなやカタカナの比率の点で違った側面をもっているのである。

四、文体上の特徴

若い世代の文章が、和語が多いという特徴をもつのは、どういうことを意味するのか。また、若者雑誌とやや似てはいるものの、外来語やカタカナの比率がそれほどでもないのは、どういう意味なのか。

これらの問いに対する答えは、その文体に求めることができる。
たとえば、

(1)遊んでドジるヤツが悪いんだよ。

(2)はじめは気にしなかったんやけど、そのうち鼻につきてきたんで、彼女に黙って引越したんや。

- (3) ぶざけてるなんてもんじゃないよっ。
 (4) キヤ!! 聞いて、聞いて下さいよ。

(5) だから少しの間、学校から離れてみたらどうかかなア。
 といった用例からもわかるように、若い世代の投稿の文章というのは、仲間に向かって話すことばそのままなのである。日常、友人に対して話しかけることは、仲間うちのことばを反映しているものである。したがって、そこに現れる語は、日常使っている用語であって、決して堅苦しい文章語は用いられない。となると、当然のことながら語種としては和語が多くなる。また、外来語についても、「テーマ」「コース」のように完全に日常語化されたものは頻繁に使われるが、若者雑誌に見られた

・将来エグゼクティブになった時、トラディショナルリストとして
 ……
 ・装置がビルトインされている。

のような、日常では使われない外来語は現れないのである。
 若者雑誌の文章は、若者の日常生活を表現するのではなく、若者にとつてのあこがれ、願望の生活を描くものが多い。現代の多くの若者にとつてあこがれ、願望の生活は、欧米風のファッション、スポーツ、サウンド、ショッピングの世界にあるらしく、それらをカッコよく紹介しようとする若者雑誌の文章は、いきおい外来語が多くならざるを得ない。それに対して、生活様式や持ち物は欧米風になっているとしても、若者自身の生活や思考はやはり日本語によって支えられている。自分たちの生活を表現する際には、外来語の出番はそれほど多くはないのである。したがって、若い世代の文章は、和語を中心としたものとなってくるのである。

表3

	名詞 (%)	長さ 自立語 (文数)	指示語 (%)	働きかけ 文 (%)
談話語	41.0	5.4	6.6	48.1
『女性自身』会話	49.1	6.9	3.5	9.0
『週刊新潮』会話	53.6	8.8	3.1	2.0
『女性自身』地の文	56.4	8.5	2.1	1.0
『週刊新潮』地の文	59.1	10.2	2.8	2.0
新聞社説	57.8	15.4	3.6	1.0
広告の文章	63.0	5.5	3.7	4.0
出版目録解説	60.6	10.6	2.7	0.0
映画解説パンフ	67.3	14.3	2.4	0.0
新聞記事	68.3	13.4	1.6	0.0
番組案内	70.7	11.3	1.0	0.0
新聞見出し	85.5	—	0.0	0.0

(樺島忠夫『日本語のスタイルブック』P220から引用)

ところで、先に若い世代の文章は、仲間に向かって話しかけることばであると述べた。つまり、話しことば調だというわけだが、このことは数量的な観点からもうかがえる。
 樺島忠夫氏によれば、話しことばは冗文的表現であるため、名詞の比率や文の長さが小さくなり、指示語(コソア系の語)の比率が大きい。そして、あいさつ、呼びかけ、命令・禁止、勧誘、疑問、判定要求、相づち要求、反語など、受け手に何らかの働きかけがなされる文の比率が大きいという。^(注6)

本稿で、先に語種や字種の比率を調べた百文を対象にして、右の各項について調査してみた。その結果、次の値が得られた。

名詞の比率 四七・九%

文の長さ 七・六語

指示語の比率 三・〇%

働きかけ文の比率 二四・〇%

これらの値は、樺島氏の調査結果(表3)と比較すると、名詞の比率・文の長さ・指示語の比率は、週刊誌の会話の場合に近い値を示している。そして、働きかけ文の比率は、「談話語」ほどではないが、週刊誌の会話よりかなり高い値である。このことから、若い世代の文章は週刊誌の会話以上に話しことばに近いと言えよう。

五、話しことば調の具体例

文体が話しことばに近いというのは、おそらく書き手に、「話すように書けばよい」という意識があるためではないだろうか。もちろん、話すことばをそのまま忠実に書いているわけではない。現実の話しことばには、言い誤りや文法的な誤りがある。「えー、まあ、あの」といった遊びことばも頻出する。また同じことを繰り返して言ったりすることもある。このような整わない言い方に対して、それをそのまま文字化しているわけではない。しかし、話す口調をかなり残そうとしているのも事実である。

(6)ワタイ短大いくのヨ、4月から。

(7)とまあ、自分に言い聞かせてみるのですが……。

(8)ふつうのタコ焼きよりちよっと……いえ、だいぶんおつききて、(9)まったくどうしていいかわからなくて……。

(6)の助詞の省略、(7)の遊びことばの使用、(8)の言い直し、(9)の文末の言いさしなどは、その現れである。また

(10)私はいつこないだ、サランラップ作戦にトライしました。

(11)マブい男が3人くらいでさ、声かけてくるじゃん。

(12)それがめちゃ速いのです。

(13)いまはチャーんとマジに働いてるんだァー。

(14)もしやる気がでたら他んとこ受けよう

(15)私も習性っていうか、まわりの慣習に従って(下略)

のように、(10)「こないだ」の融合形、(11)「マブい」、(12)「めちゃ」、

(13)「マジ」などの流行語や省略形、(14)(15)の傍線部は、話しことばをそのまま書きことばの上に移している結果、だと言えよう。

そしてまた、終助詞の使用にも話しことば調が強く現れる。

(16)あのね、聞いてちょうだいな。

(17)ちよっとヒドイね。

(18)まったくムカツクよ。

(19)浮気されたくないからネ。

(20)でもネ、受験の日に吸うなんてサ。

話しことばの調子を書きことばに込めようとする態度は、さらに表記にも及ぶ。普通、話しことばを書きとめようとする、話しことばにおける感情やニュアンスなどは脱落してしまう。それに対して、わずかも話しことばの雰囲気や伝えようとするのが次のような例である。

(21)イヤな女が嫌いになつてくれたらしめたもの。

(22)アイビーがスキで読んでんじゃねーぜ!

(23)透き通るようなカワユイ声だったのに。

(24) メロディをやたらデカイ音で吹くのです。

(25) ゲタ箱をあけると、ナント手紙が入ってるではありませんか。

(26) テーマ曲も決まりました!!

(27) ともあれ、渡辺典子さん、ガンバッテ!!

(28) 俺って律義な性格だな。

(29) すんげえ痛かったけど、後悔してないヨ、

右の(21)「イヤ」、(22)「スキ」などの感情を表す語や、(23)「カワユイ」、

(24)「デカイ」などの評価を示す語がカタカナで書かれる。これは若

者雑誌の本文の場合と同じことだが、カタカナで書くことによって、

それらの感情や評価が強調されるのである。(25)の「ナント」のカタ

カナ書きは驚きの強さを表すためであろう。

(26)(27)における感嘆符「!」「!!」の使用は呼びかけや応援の口調

を示す役割を果たしている。(28)(29)における長音符号としての「ゝ」

の部分は、話しことばであれば、より感情をこめて発話される部分

であろう。その強調の気持が普通の長音符号「ゝ」を使わず、「ゝ」

を使わせたと見ることができると、このような符号が多用されるため、

先の表2に見られるように、記号の比率がAの若者雑誌の本文やC

の一般雑誌の投稿より高くなっている。

なお、他に一般の雑誌には見られない、次のような例も見られる。

(30) But、今年の夏はがんばる。

(31) SCHOOLは、とーの昔にやめてエ……。

これらは、話しことばではないが、若い世代が身近に接すること

ばである。それを一種のかざり、あるいは遊びとして用いているよ

六、むすび

以上、若い世代の文章には話しことば調の性質が見られた。若者雑誌の文章の場合と同様、最初に述べた「新・言文一致体」の特徴を認めることができたのである。ただし、それは若者雑誌の文章よりも外来語の使用を抑えたものであった。使われる外来語は日常生活でよく用いるものに限られており、全体としては和語中心の文章である。この点から言えば、若い世代の文章は、若者雑誌の文章よりも、一層、話しことばに近いものである。

もっとも、こうした話しことば的な文章は、友人間の手紙などの私的な文章では、以前からある程度は使われており、公的な文章では影を潜めていた。それが最近では使われる範囲が広がり、投稿のような半ば公的な文章にも登場するようになったのである。

話しことば的な文章を表記するにあたっては、話しことばをそのまま文字化したのでは表現しきれない、感情やニュアンスを、カタカナや記号を活用することによって表そうとする。ただし、カタカナや記号を用いることは、それによって一般的ではないという意味を付加することはできても、その個別の特殊な意味を明示することはできない。どのような感情、ニュアンスを表すものかは、必ずしも一義的ではない。したがって、カタカナや記号の使用は感覚的にならざるを得ない。というより、感覚的であることが若い世代に好まれて使われる理由だと言わなければならない。

注1 佐竹秀雄「若者雑誌のことば」『言語生活』三四三号、一九八〇・

七)

注2 国立国語研究所報告25『現代雑誌九十種の用語用字』(秀英出版、

一九六四)によれば、漢語四一・三%、和語五三・九%、外来語二・九%、混種語一・九%という比率構成になっている。ただし、この調査の対象になったのは、一九五六年の雑誌で、現在からするとかなり古いデータである。現在ではもう少し漢語が減って外来語が増えていると思われる。漢語が三〇〜四〇%、和語五〇〜六〇%、外来語が五%前後ではないかと推測される。

注3 野村雅昭「週刊誌の漢字含有率」(『計量国語学』十二巻五号、一九八〇)に、週刊誌の字種比率の平均値として、漢字二九・九%、ひらがな五〇・一%、カタカナ九・六%、その他一〇・四%という値が報告されている。

注4 雑誌六十三誌に含まれている記事を、小説、評論・論文、実用・解

説、ルポ・報告、インタビュアー・座談会、読者投稿の七種に分け、それに該当する記事を、一記事当たり千〜二千字を単位として、全体で一九六箇所選んだ。読者投稿は『世界』『現代の眼』『婦人公論』『ミセス』『旅』など二十誌から二十三人分(字数にして約四万四千字)選んだ。詳しくは、佐竹秀雄「各種文章の字種比率」(国立国語研究所報告71『研究報告集(3)』所収、一九八二・三)参照。

注5 字種比率については、注4の拙論の中で報告済みであるが、語種比率に関しては、今回改めて一文章当たり四文字づつ無作為抽出して教えた。

注6 樺島忠夫『日本語のスタイルブック』(大修館書店、一九七九)、同『表現の解剖』(三省堂、一九六八)参照。